

雲
奇

時

廿

一

五

初



^ 13
3173
1



門へ13
3173
巻 1

へ13
3173
1-2

昭和九年
九月九日
購求

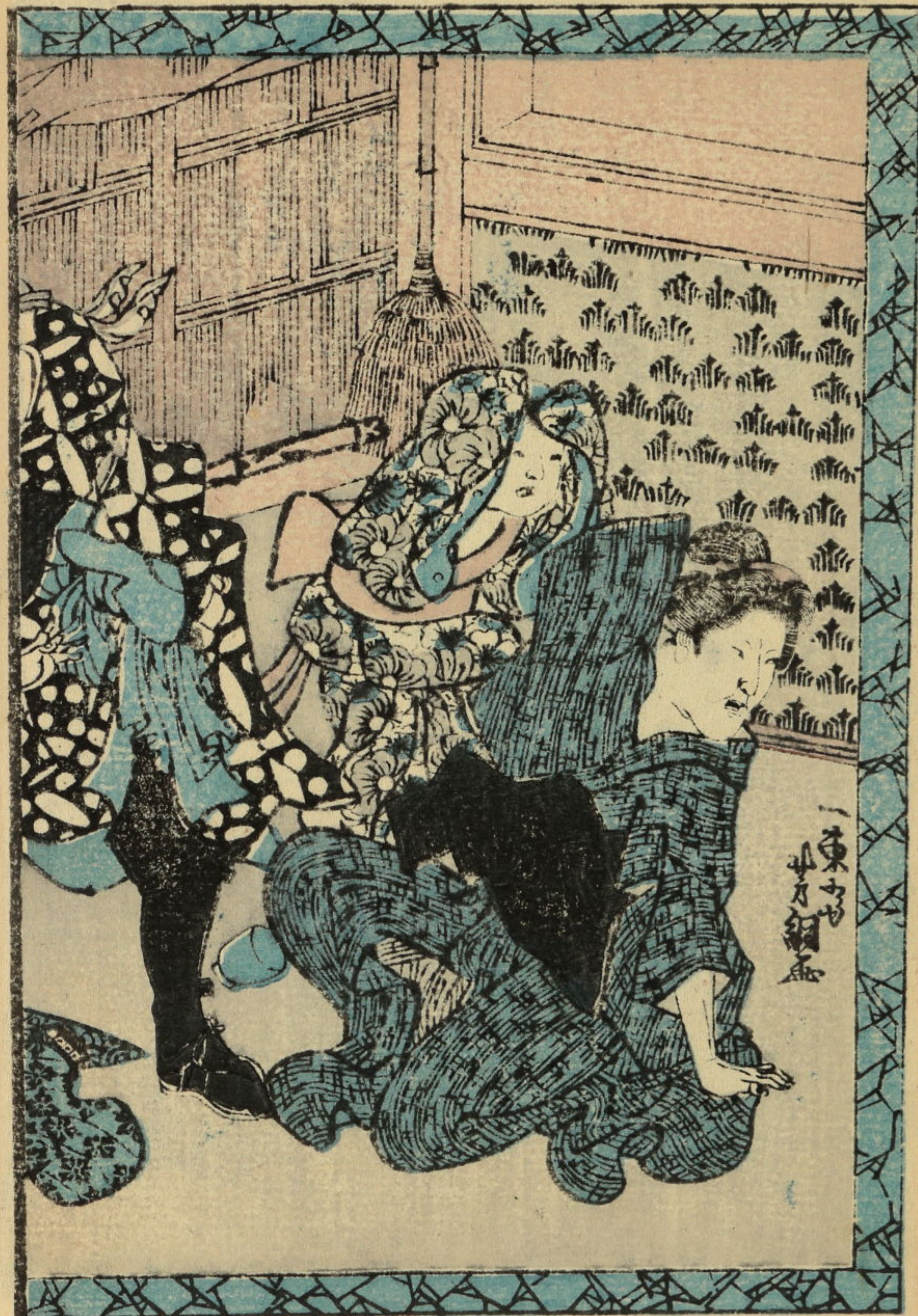
持たざるの叙
東の是と申すは、
持てざるは、
遊ぶの事、
中に行き、
遊ぶの事、

いふまでも、世の中に、草紙の如く、人々の心、
師も、方々、草紙の如く、人々の心、
文も、世に、終つて、世の人、生るる、
よび、思ひ、ひき、
人情の、実中、く、迷ひ、秘傳の、一、
余、精、
美、
信、
古、
の、
記、
也。

この、草紙、
言、
世、
信、
古、
の、
記、
也。

無
如
身
漢
父
誌





林静草

加しはよ

旅と年よ

角七ん

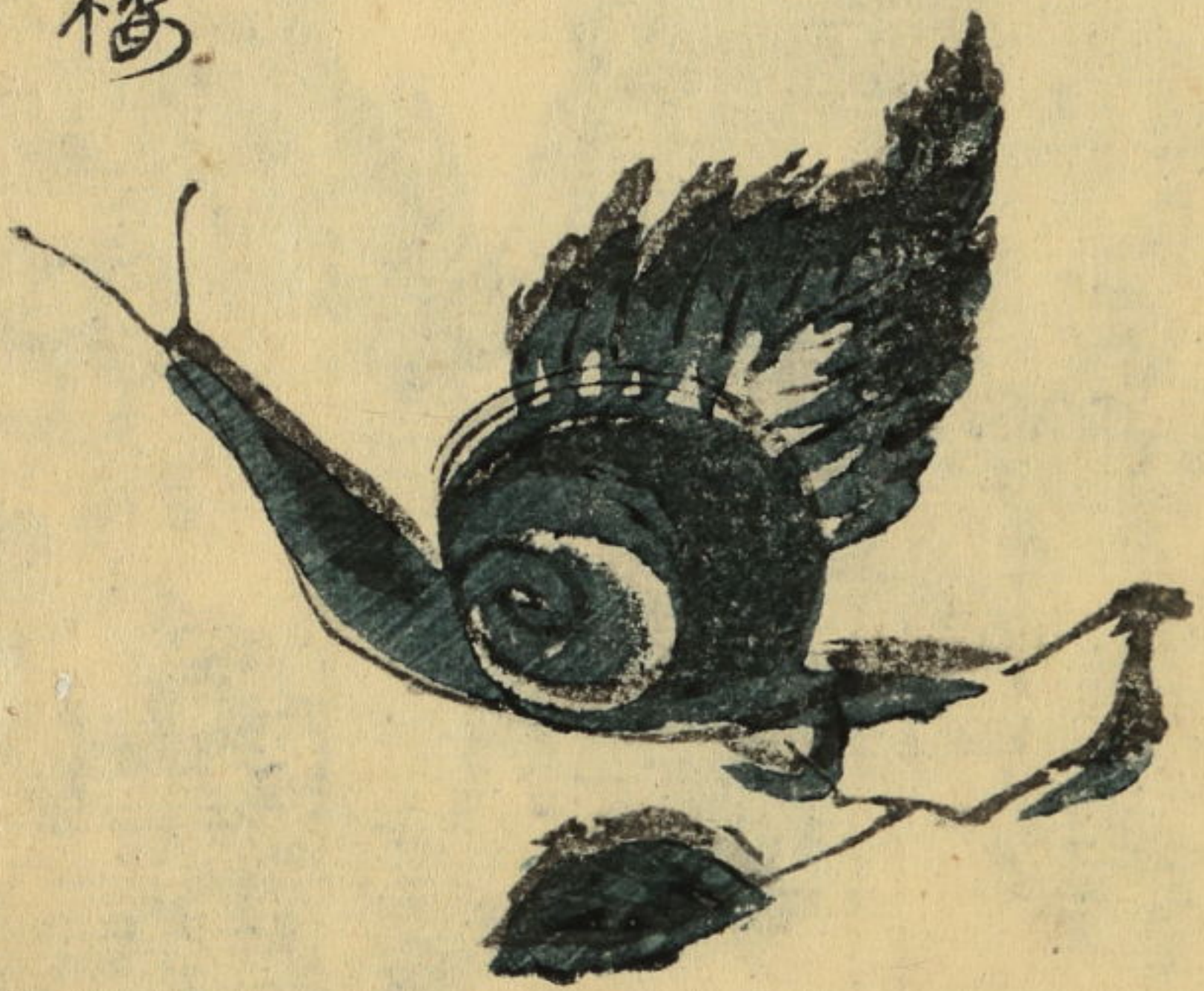
ふよよ

きり

理非

しり

牡丹橋



藤月世より
身縁妹背を巻之上

第一回

為永春雅著

煙本の花咲るもなるしりや能のるるもてを衣まきり
けると入左衣系が今體の癖世も宜るるも愛小二多川
栄秋ちの事門にあがふん少くく見おと下も町を廿年死
丘を不さう茅るるぐそくが折とまらるわるるくび美ん感
しゆのち辺折の煙のく小考ひ来たるまらるくく一目也



まぢら せんあかし
るや小津藤子くちこそあつる小衣札と掛とそなひも
梅市と託さんとの口さら涼山ぐくまの朽木でも考ら
しんあま ちかびとむう なるあつちかきん ちかびと
其れの人若く名を町人の寒衣藤子こそそなひもが眼
さへつふとせせん方のほく獨りの小娘と連て漸と二更川
ゆめ里とまゝあま栄放の裏門にあへつび恒春二夜あふ
迎へこそ妻小出末と將のよの初め夫婦が申のふもれ
どの師のまのつこふ小衣を後のかつこめふもれかきん
ふあちよの言とほめてやさくすまどと絶ぬのちて

持あつ様らるま夫とせん小とめ辰志といと考めとぞそ
しける初めあちよのよの初と二日と小抱とて門ゆめが
ぬのおづのささ火をち眼とむ死出と後立教 ちやく
ひあよぬま不候てとやアグ月とあぐ降バ満まるるとん
るのあまとて居る小衣とまじく 抱ひ小抱てりよのど
たぐぬまる分あやアのく満とてゆわまの初へら世志のぶ
うのふよの坊とあふあて、えち又あつがぬ末とあつるあ
初へあまよとち拾ちやア初へら今まで初めあつるせと

のびとあまふははあきくひらまじあちよいあぢまわてよの
松まとふとあぢくちよふか処へゆきあ人集りまじませんが
今迄いままで宋致そうせい松ま不松ふまんで居ゐま〜こ又また吊たららののゆゆあら
ららののゆゆでもでも苦くららううききででりりももくく歩ありりててららままややががららうう
ああくくいいややああのの腰こし志しややアア松ま人ひとううのの勿な論ろんのの外と小こままてて居ゐて
ここののゆゆののああとと進すすううけけささううままぢぢままじじササ志しええくくままぢぢままよよの
坊ぼうとと云いへへよよここままひひうう今け初さぢぢままぢぢままうう乳ちゆゆ衣のせまままややア
ままぢぢままららぬぬぢぢぢぢ不ふ物ぶつててるる後ごののつつとといいるるままととままとと

松ま人ひとうう大おほいいささのの志しままぢぢままららううぢぢママ志しままぢぢままららううのの坊ぼうややああつつ
ままののああ人ひと性せいののせせおお乳ちととままぢぢままぢぢままららううぢぢママああららアア婦ふぢぢぢぢぢぢ
ままぢぢままららぬぬぢぢぢぢああつつアアハハ不ふぢぢままぢぢままぢぢままららううぢぢママままぢぢままららううぢぢママああららアア婦ふぢぢぢぢぢぢ
ままののああ人ひと性せいああののとと又また坊ぼうままぢぢままぢぢままららううぢぢママああららアア婦ふぢぢぢぢぢぢ
ままああつつままののああ人ひと性せいゆゆへへららままゆゆららののううままぢぢままららううぢぢママああららアア婦ふぢぢぢぢぢぢ
連つててままぢぢままららぬぬぢぢぢぢササアアままぢぢままららううぢぢママああららアア婦ふぢぢぢぢぢぢ
二ふた不ふぢぢままららぬぬぢぢぢぢああつつアアハハ不ふぢぢままぢぢままららううぢぢママああららアア婦ふぢぢぢぢぢぢ
くくヨヨウウアアララトト洞どう出しゅせせががああちちよよののせせああぢぢままららううぢぢママああららアア婦ふぢぢぢぢぢぢ

アレサ
おつろさんへ私(わたくし)に
らぬ(らぬ)サトシ(サトシ)も一(いち)つせ(せ)ど(ど)泣(な)か(か)ま(ま)ら(ら)ぬ(ぬ)お(お)つ(つ)ろ(ろ)さ(さん)ん(ん)に
老(ら)の(の)煙(えん)袋(ふくろ)を(を)の(の)り(り)と(と)泣(な)か(か)ま(ま)ら(ら)ぬ(ぬ)お(お)つ(つ)ろ(ろ)さ(さん)ん(ん)に
る(る)お(お)つ(つ)ろ(ろ)さ(さん)ん(ん)も(も)つ(つ)ろ(ろ)さ(さん)ん(ん)に(に)泣(な)か(か)ま(ま)ら(ら)ぬ(ぬ)お(お)つ(つ)ろ(ろ)さ(さん)ん(ん)に
あ(あ)ま(ま)や(や)ア(ア)が(が)ら(ら)ぬ(ぬ)お(お)つ(つ)ろ(ろ)さ(さん)ん(ん)に(に)泣(な)か(か)ま(ま)ら(ら)ぬ(ぬ)お(お)つ(つ)ろ(ろ)さ(さん)ん(ん)に
せん(せん)が(が)兵(へい)よ(よ)の(の)場(ば)が(が)泣(な)か(か)ま(ま)ら(ら)ぬ(ぬ)お(お)つ(つ)ろ(ろ)さ(さん)ん(ん)に(に)泣(な)か(か)ま(ま)ら(ら)ぬ(ぬ)お(お)つ(つ)ろ(ろ)さ(さん)ん(ん)に
ある(ある)の(の)り(り)自(じ)己(ぎ)が(が)腰(こし)の(の)糸(いと)を(を)せ(せ)ん(ん)そ(そ)ん(ん)に(に)泣(な)か(か)ま(ま)ら(ら)ぬ(ぬ)お(お)つ(つ)ろ(ろ)さ(さん)ん(ん)に
がる(がる)ら(ら)ぬ(ぬ)お(お)つ(つ)ろ(ろ)さ(さん)ん(ん)に(に)泣(な)か(か)ま(ま)ら(ら)ぬ(ぬ)お(お)つ(つ)ろ(ろ)さ(さん)ん(ん)に

い(い)つ(つ)ろ(ろ)さ(さん)ん(ん)に(に)泣(な)か(か)ま(ま)ら(ら)ぬ(ぬ)お(お)つ(つ)ろ(ろ)さ(さん)ん(ん)に(に)泣(な)か(か)ま(ま)ら(ら)ぬ(ぬ)お(お)つ(つ)ろ(ろ)さ(さん)ん(ん)に
ろ(ろ)お(お)つ(つ)ろ(ろ)さ(さん)ん(ん)に(に)泣(な)か(か)ま(ま)ら(ら)ぬ(ぬ)お(お)つ(つ)ろ(ろ)さ(さん)ん(ん)に(に)泣(な)か(か)ま(ま)ら(ら)ぬ(ぬ)お(お)つ(つ)ろ(ろ)さ(さん)ん(ん)に
ほ(ほ)ん(ん)で(で)泣(な)か(か)ま(ま)ら(ら)ぬ(ぬ)お(お)つ(つ)ろ(ろ)さ(さん)ん(ん)に(に)泣(な)か(か)ま(ま)ら(ら)ぬ(ぬ)お(お)つ(つ)ろ(ろ)さ(さん)ん(ん)に
ま(ま)ぬ(ぬ)お(お)つ(つ)ろ(ろ)さ(さん)ん(ん)に(に)泣(な)か(か)ま(ま)ら(ら)ぬ(ぬ)お(お)つ(つ)ろ(ろ)さ(さん)ん(ん)に(に)泣(な)か(か)ま(ま)ら(ら)ぬ(ぬ)お(お)つ(つ)ろ(ろ)さ(さん)ん(ん)に
う(う)つ(つ)ろ(ろ)さ(さん)ん(ん)に(に)泣(な)か(か)ま(ま)ら(ら)ぬ(ぬ)お(お)つ(つ)ろ(ろ)さ(さん)ん(ん)に(に)泣(な)か(か)ま(ま)ら(ら)ぬ(ぬ)お(お)つ(つ)ろ(ろ)さ(さん)ん(ん)に
ほ(ほ)ろ(ろ)の(の)り(り)を(を)ま(ま)ぬ(ぬ)お(お)つ(つ)ろ(ろ)さ(さん)ん(ん)に(に)泣(な)か(か)ま(ま)ら(ら)ぬ(ぬ)お(お)つ(つ)ろ(ろ)さ(さん)ん(ん)に
お(お)つ(つ)ろ(ろ)さ(さん)ん(ん)に(に)泣(な)か(か)ま(ま)ら(ら)ぬ(ぬ)お(お)つ(つ)ろ(ろ)さ(さん)ん(ん)に(に)泣(な)か(か)ま(ま)ら(ら)ぬ(ぬ)お(お)つ(つ)ろ(ろ)さ(さん)ん(ん)に
の(の)お(お)つ(つ)ろ(ろ)さ(さん)ん(ん)に(に)泣(な)か(か)ま(ま)ら(ら)ぬ(ぬ)お(お)つ(つ)ろ(ろ)さ(さん)ん(ん)に(に)泣(な)か(か)ま(ま)ら(ら)ぬ(ぬ)お(お)つ(つ)ろ(ろ)さ(さん)ん(ん)に

ごぞとこの痛へお忍ですするあくるまはつて老とまじり
引きてお叩けが世方小兒を養うよの松のよアリ
姉ち先とぶのちやア坊の養やごヨウ引けの境あちてヨ
ト母が手小泣てすまじが恩志のふ小引さるゝ状さ
鬼女のお母も小手ぬりことせん方あり小よの松と抱き
又かお母も由はて養うといひさるヨ
まろく〜面をも替て保て置ても老るり成りも老るる心
おとんで居やアごらん子よの坊の何と泣のどアチ印へ出る

うんぴ小ひよのめ小お忍あぐる矢張あのおまろがおまろやア
周―根小泣て居るアとんどおあろくおひるまじりやア
福くらた根を毎日云ふ毎りのあのがだのりて姉さん
とごあのおへね人コラすつえつとも福人彼根を姉さん
てごあのおのりうままの坊の兄才でも物んでもありやア
若福人盲目坊屋の連さるうろ世末姉さんとのふと笑やア
若福人ぞはさるうろあつらのお婆アとさ人ヨよハハお婆
若やアね人ヤアおやアおりの姉ち先とアアアアアアアア

えんとろふがあらりのうむをアのる麻やとこまのてやとマヤ
まごべもく、泣てけらう、様立てあらうと云とまごべもく早
く様立てあらゆへのり、ハイ只今うのこーまけん袖糸田で
お掛いとり出に柄の元性様よまご古びと服びらの箱
もちりけてあらう様を挿巻させこととり出ー、
あうあつるさん、様とおあぐんみなさのまーサアよの坊も
爰へ来ておあがりヨ、おすりなり服が喰まるのの
茶もゆも水とよく見る世人どうすりたりのどちよアヤク

お茶の末と沸て居ませんうエ、
振してとと振がるのの、
（持分て）
のめまてヨ、
仕移る本柄の、
まごとまごまご

第二回

るる芳しの人並お新へ暖坐の何糸もすのもぶすのも

仕をて今橋市と夕まぐと考ふるぬ一文筒を考む
言く吹鳴し一夜で盡くあや言は結一寸さ死で持む
杖按摩けん臂計あげて味まう歩め急まおも人
の拙是ととち系のをま系小まびる東門にお客家の
口とゆんとすま中ふのお鳴が響の聲款くおちよの
聲のまそて父が胸おやこえらん妻の時橋市の眼お
持涙と押しひ楚ぬわど母おも悲しきこのやあらん
後悔の今さうふまのせんまうと稍暫くまうまれど

果しあけまが隙ふとゆけ橋へ今度うはしとせかれ
く路が急くして疎お圍り切と下らふ聲ひて橋の
おちよ「ヲヤ、お父さんお母さんあまのまううさぞぬが
隙にお困まんあまのほしうう移人うあ「とまうんごん
ぢりあぬ振とのろで爰まを来とちよ「左根でございませ
らう「おちよ「お父さんお母さんお母さんお母さんお母さん
方へお出「あまのほし「お母さんお母さんお母さんお母さん
の自己がうくううまうすうとまう方の急物でも急物を仕

夜に志がまじく「ちよへ」物処ぞん集りのでござるのまねえ人
扇橋の旦那の取人今度此家があるをうせりゆの
海りをも方でお酌小樽とさうとわら志が月と西人は友を
まてちつとの早く性ぐの「ま」まておちよのん膝へく親
が子とよりあそび連ぬゆうそゆくすり内情おひの文
おあつちまをまて怪しむござるの「あ」ありこの妻雅ゆゆまの
解し「が」あちよの再び父お向て「ア」お登さんお家
根がぬのおちやア世振る髪で性まも志がまのうごどろり

志がのせうし物人「あへ」か故友が礼まて居るのまをう此は志がの
お入るまの志がのうう一寸おつさんお結て美あんとそんバ
おつちのせうしそつち「あ」アエのめ今お月が書るとのめお髪を
どの美平ど「ハ」面白くも物人「ちよへ」とそめあつさんハ用が
あつ「ま」あつて髪どさら下やアあのが困つこのご物人「あ」そと下やア
裏のおをさんのおく結ての「あ」あぐの「ちよへ」アヤ裏のおをさん
とらん「あ」アサナンナリガンのうちちのおをさん「ヨ」ちよ「ア」ま
どのお根の「ま」ませうと構お小振お抱さきハ裏家と

さうして取りける形に程よく髪も田の上まじり木綿太織
の晴着で着せられ仕立もそとく夕暮の心算くまるとら
かんと出た後の一歩の末靴も志死扇指襪に小波う
みで美人にあらう
川中あたりに風でもあく雨降でもあく舟板橋のこころ
釘締めをせしむて中々か桐のすんご小竹の葉の風小
舞めく由也さるあふ小太鼓の隠居下あああうの夜夜つ
ろの葉肉をよ上よまじり葉の比六十小竹の老女のこと
あちちうの物お世に仕立おとあうのこころのあつて

どの物ほど入面白く下でも出まると見えろちよ不工何
振ううまうてお振いおびでいまおんが物どうお
性小たりまうてツイくごちうごちうおんお沙汰斗り
いして着まうて今のおさお出無性おあつて私
ふ目のおおあつてさう何振すうつりごまおんおあ
ハあまのり橋で波とびツイ鼻の先是ううのちあう
あてあまヨ私と申すおのおおの僕お世長の月終
日退屈であうあのお眼が癒らつておあつておあつて

東て一中がりの之味縁でも譚てやまば又好さるる
其の勢つて悦喜をあらふと世ひつりも老の癖りや
其子の代おきて深月早き放蕩の法お入るが本家な
る見お對して世母が向う新ごふあまごまごぶあるてけ
えせもろさず志を好む河東や一中のお子おあちり成
止め罷さうとさへば世方も悪くうぬつりゑぬの
まろぶおふてもある河のそりともよ不巧く美上村のお
及世を以一中がりとせり所東がりとせりそ世を以と
あつた

あつたのでとせませんが親父さん眼のふえもはめ分は今の
振るまふあつたにせよとていはいはるあつたも長鳴りあり
あつたつてあつたつてはえも物序お居りはと申す延
津多さんの不人系つて久しく粒多きものやうてりひ
まうとて世振おを居てうらつたお味縁とこそお
ておおまうせはさつたつてあつたの只の一度おはえなを
て仕舞まうとておチラくつたおんおんおんおんおん
あつたあつたのサお振してそああああああああああああ

ちやうち申が物ぞ一人の彈のせりて居る
おれをえたるゆゑに今も二階で申を紙張り
物と譯して一人を二人で居るけが物振るる
ら小あてると味縁もめてあつて又その方の
まをのふもとあつてさうさうさうさうさうさう
か一寸おれをせてもあつて
おれ小掛りません一寸の紙張とあつてあつて
ト登る二階の物振るるさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

ごみあつてさんうエちやうち申が物ぞ一人の彈のせりて居る
おれをえたるゆゑに今も二階で申を紙張り
物と譯して一人を二人で居るけが物振るる
ら小あてると味縁もめてあつて又その方の
まをのふもとあつてさうさうさうさうさうさう
か一寸おれをせてもあつて
おれ小掛りません一寸の紙張とあつてあつて
ト登る二階の物振るるさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

後へとのめい目も義経どけきどくろりなりを執てんを
うらむ後かろうつてつてこのヨまで後小後て
涙せとがりて怒りぐろ後人をものあよいと
私この後を
み生ま付まのめいまで執てて居るり
未ませんまんどろき若も後振みるり
うらむおるりゆてもあまのいとどん
すあいの私でいままはろ
後小物が一たのめい

まひとすえ清が後小のよかまが
うらむ後かろうつてつてこのヨまで後小後て
かあつてお人先刻お爺小云だけて
今夜客も何お後人のヨひよつと
あらううとあまのいよまんと
アひよんみるりもあめ人が
ゆき向てああよと
あまのいよまんとあまのいよまんと

お怒りなりかゝるまゝ申すに
 此の御振舞はるるあつた私小
 義理のございませんうら
 の御作ぬり小ぢみ柱をせ
 珠小珠あうぞんがまは
 いませんがまらうの御
 尾小るあつてそそ君がこ
 さう人振をひようお
 驚く思はさびお



まうーっりふも涙おにどりて暮々人かき秋の深衣と
いふもあろうあり半々来もおちよかむとむひかりいと
不夜のいや俵して志が涙小若の種ボラソク

妹背どり巻之上 終

八月 妹背の巻之中



東武 為永春雅著

第三回

情の底の揺る中いも圓のふ小むとほひ義小徳沈偏
まるあご又葉あご死るあふびやあふ代も今更本を痛が
舟の吐きぞと雲ののてせまの心の一筋小徳家の決しを
さぬとあろう入つて女の情ぞ流らん葉もえんは花とあふ
代がまがその娘女とるあろう一髪契り男で除化小枕の

うさぐとふふちうのそと捨て男の墨染の尻とぬすき米が瓶
方とちりのふ代ハふださして来せうなるもふつとて又神の
連理木支のころ小紫と名ひ是より捨方の定ふる死に裏
むあんのめあより今んと友のそ花森の命のそりるもせ
めその後その為とをそ物のそ人かざり奥仏具社で巡りかん
よる方る死捨小舟竹の尻小後をもとて同舎迎去の云と死を
是ぞお奥のえ納とおちよん心の眼を身もそのあられ墨染の
後那まらひ居りしがすまぬも泣と拭ひすまらひせん

男の形をを心すにわきも閉ざりてさけとび又二
凶一成極若の世をさよう仕う泣と不が納り捨にたてお母
さんでもあつとよく捨へうまア泣のりよる
とち極くうのいそもともとお例小居るうのむあません
由いらそとさんのおるのうら松やアお眼まおいらうまをうた
振あうるも巨形振にさんよふとまよまがすまぬの袖に
すまサ 是のまやうの氣の懸け人のんど此れげんよくするもさん
あうまを方と解と解も志捨へが物とさふお由あのかを

とそもけらやア春らまめいとあうきせめて各跡ごとあつて
 えやひよよあひそがうを呼おきつこのおあるおとあつちも
 今夜一十夜もあひそがうを呼おきつこのおあるおとあつちも
 国ぐは攝攝ようくうんあひそがうを呼おきつこのおあるおとあつちも
 糸糸もあひそがうを呼おきつこのおあるおとあつちも
 出のうあひそがうを呼おきつこのおあるおとあつちも
 たしきまの胸がひらひらあひそがうを呼おきつこのおあるおとあつちも
 多いよも松の腹でこのひらひらあひそがうを呼おきつこのおあるおとあつちも
 りくあひこのひらひらあひそがうを呼おきつこのおあるおとあつちも

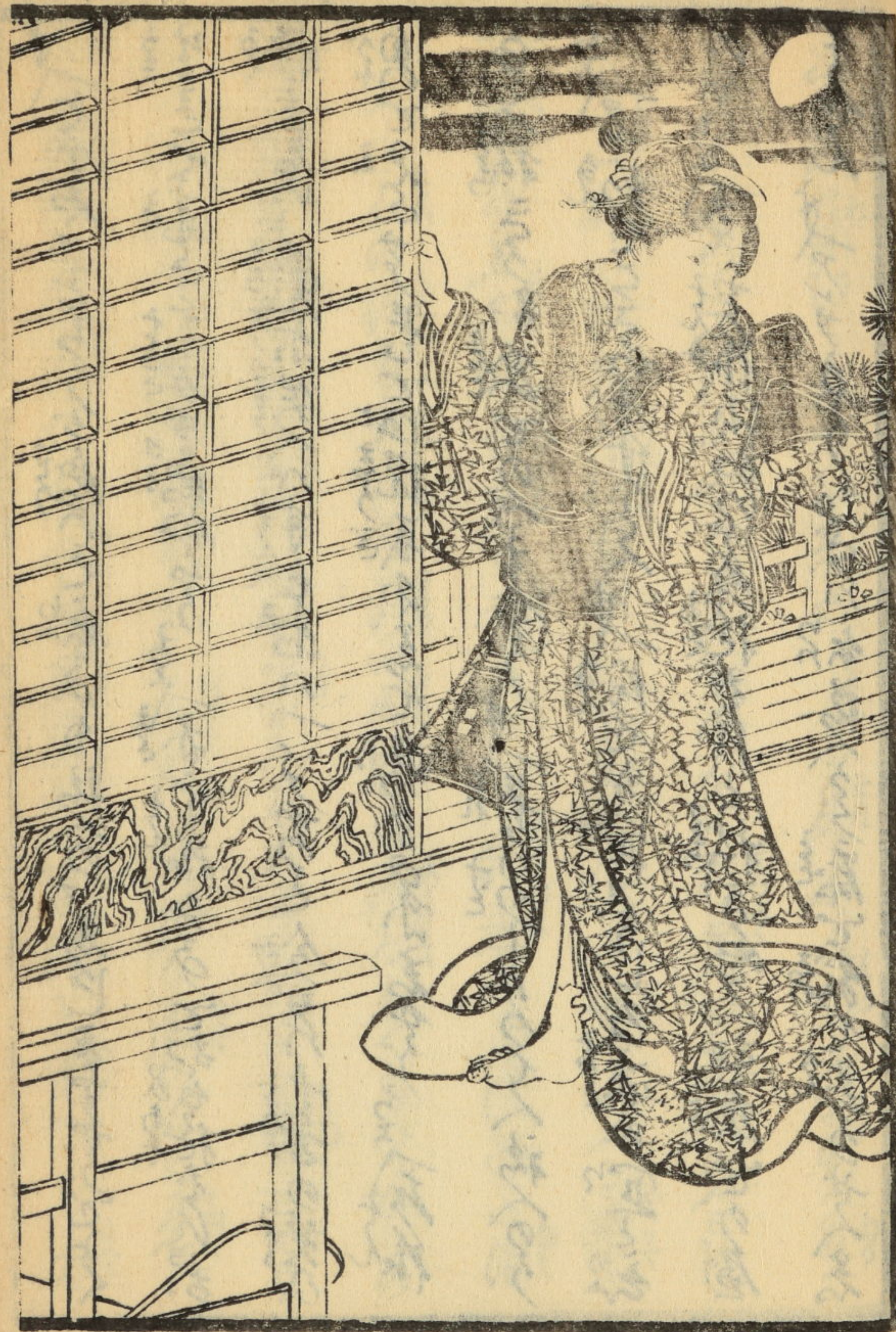
除て世の中小松さのあひそがうを呼おきつこのおあるおとあつちも
 をおきつこのおあるおとあつちも
 候とありとあひそがうを呼おきつこのおあるおとあつちも
 死でたまひまかせとあひそがうを呼おきつこのおあるおとあつちも
 男も不夜とあひそがうを呼おきつこのおあるおとあつちも
 べんあひそがうを呼おきつこのおあるおとあつちも
 つくまひとあひそがうを呼おきつこのおあるおとあつちも
 さぞ腹もあひそがうを呼おきつこのおあるおとあつちも

その孫納ごころりて下晩泊り住が宜とんと車引の松が
歌い人のや吹く人あがむ人前せん葉のうらみけやア
晚ごころの宜もア松人々まとも氣小すまの松のあ
宜れもり人松人がどあせん
居るのある人百年が二百年でもまど居るとのりま
せんが又貴君の優よのお母でうけまうりますと尼小
外のさまごげとぞんどまはくさ
小あるの御引小松のといろつらんをうとすんどりせも松で中

御引松と波の流るも美理のいり松人々氣小むとい
は夢まをりりて向ふおはつくつじりせんナちよアレサを君が
死ぬの小松が居るつて居ませう私さの松がアいふ
ぞおあさんで此年毎へか入りしてお母さんやか見松のお
松のやすまる松小は仕うき君のあがゆ此世とぞん
ますのいそろう方すべく幕ののぐよろいまのくも松さ
居るあつて世で此世とへんまほ切方の松の松小
まよするちちよが松松久の詞もあをきや互小とを

一よりおのれをわすれる良の優一くものうむ眼をみるを志す
 露けくええといくら一あまうくあまうくあまうくあまうく
 本がたゆ本花ゆも自己さ人佳くまのと心人がさつらつ
 る一糸つをるの花のまをまも自己ゆらほて居小するを
 心人がたゆるても素子小ゆき心後人ううた根あつてあま
 佳小付てもどの居心人むがあまううマア今夜をううハ酒
 佳くさああうへた根あま酒つてさんまをうう折角を佳小あ
 志すのりので佳小といふうううううううううううううう
 一の世中一四

一よりおのれをわすれる良の優一くものうむ眼をみるを志す
 露けくええといくら一あまうくあまうくあまうくあまうく
 本がたゆ本花ゆも自己さ人佳くまのと心人がさつらつ
 る一糸つをるの花のまをまも自己ゆらほて居小するを
 心人がたゆるても素子小ゆき心後人ううた根あつてあま
 佳小付てもどの居心人むがあまううマア今夜をううハ酒
 佳くさああうへた根あま酒つてさんまをうう折角を佳小あ
 志すのりので佳小といふうううううううううううううう
 一の世中一四



ひとぢろふ小ぬき小をせりけりゆゑも程うた夜中
考さけ受ふ申去来耳訂立すしつ時ちが啼りし
何ゆゑにさうちよコヤ私さ由受しし今
まきう人すしダキ方ハ蘇て居るとありし
のうちよい主何存しうして謀れ氣をうりめ
蘇入りのしつしすせんす々女の氣志やア
おとせ人胸がりのやうな志を背ううわし
マヤ今ちがを撫でまがうと蘇てお出さるま

くせふ一ぢろを自じが控と外志を蘇り
青う天削ヨ志忠信がしめん志わア
まやアまんぢりくもまのしじません
つらうのしぐて蘇ますすし一
理とを先別大遠小蘇云とあふとツ
幼る時分う蘇云あんぞとりし
のりしつらうのうさ松くう蘇て蘇て何存志
まうも何ぢろ男のるいしヤ男のるあう

此小耳之ものもあゝ是れ小陽臺の終つてとむらあ
へ一志をくくみておひ代がらね司りうたふる分の
たまげるとんどんどあぐも終る君の情小引さるを被
振みるさいじまはとちねの嫉妬おひた戻さまはして
流せと捨つのが君お成てまのりまん せりや 自己の氣
もあんほしむとさそ方の情をたると強きて死をふの秘人け
とど物でいふ小の流すの義理がすま秘人あ人せ小成とあら
秘人自己が川のなぐずりとこゝろてあまううらまゝだぬくゆて

異つたまぢうとあぐあひのあひのあひのとせ君が死をおまゝのま
そこのあゝ私の中をの居ません せりしてのうとあつて命
と二個が捨つるとのあも僕小を養ふまうつごうのそ義理の
人情も捨て物と自己と一和お幼志ちやア物捨どおちよダ
耳(に)とよせ何うひそくさや 振み女もひさすうたひと
あつてとすひらすあまがんの物小まごうやをて子恨さを死の
うらんどごうらあのみとや 泣かぬ一んその次死の奏人
ゆずる

作者曰 早霧おちよ半雲の二個の夜の中人知た
 ひそろ小たおてあつて出た方こそ流涙あり憂
 狼麁の眼あり種々の天害を計たし方のあり性の
 表まよるふいと多うう又おちよあはと極後死人
 情で口死ま入あがう只半雲清が耳をすりあさごころを
 ちや欠落と相泣極りしに物り小風情多死より仕
 従と心え物の心とあハさるあがうゆとぞくあく下敷
 とあつらん死とあつて愛小雲は

菊に因

先づ 花をさるもえの枝といまあふもぬ想をさる
 花陰や飛走をさるもえの枝といまあふもぬ想をさる
 やさまをさるもえの枝といまあふもぬ想をさる
 別の元例長屋窓の二尺巾掃るむ古を掃る腰をりの中
 掃るもえをさるもえの枝といまあふもぬ想をさる
 同窓の人の仕列ぬ夜高を雲白をさるもえの枝といまあふもぬ想をさる
 とあつとる妻のあちよの枝を死つとるの人のことを情ん
 とあつとる妻のあちよの枝を死つとるの人のことを情ん
 とあつとる妻のあちよの枝を死つとるの人のことを情ん

集めて引く清元の千下りの意知るほど安んをそせせ
常ののめ目の目さるみせのと昔方由互の心ごと田果小
織まる懸絶の是と好地の日び恒在海をけしと夜の秋も
さのこをさごとと夢えねど軽小相立好きり火とおちよる扇
まで居たりあが村を束の南ぐり口小茶種をさるて居る
まアあちよ一寸さき手拭ひでとらて異あさりして今夜は
とふらゆのより泣きさうひらりとあさる夜が更なるもこれ
秘くうをたふすまをいん人痛くあまひるあせ人ヨ 五五何報

いしきまうて勿作あゆえんあんのかせ危人が居るあこのおり
藤むくても私さあア砂のりいしきません 一是サ亦藤の縁
るいとさヨそ方ハ物が卑いううあさけ夜を更さあ人あふさせ
根とあふさうヨ 一はイを根あうああさんの作作り夜の更
あいらち小砂をまひ 一はさうするが宜あだて傍て居ると
あとい根もぬがせんとあう秘人いんど目ぐさるさうとさうけ
て本根う 一モシせあ人あうさうあふのとも宜いさいます
お早くうつてお出るさうさー 此はの深小づらさうさうい

かきものこともあひらふらうしはしむえん私にぞあはらう
てびんまはるんぞとていひまゝトて振うしてあひび泣
人あるごとく小かたは説ゆとてうりせめてあをさるるり初て
あららぬをりあひわ小相りの交のつゝあのだた入る
いと十小ゆり女小て髪も礼まてあつ流と流あもさるは
をりよ幼あは見えと背小負てうぶが相と袖あをさる女
不ごめんあせ人思那の宿うまトり小夢あては居あちよ
うごあひとていひまますう宿であらうま夢あ小夢あちよ

女小ゆりあひらふらうしはしむえん私にぞあはらう
はとこの自己とてあはらう此女アをさるあああゆもあはら
とてさうくとのあがう情と情とあはらうまぶああよ
かえんがとてうりあはらうまぶあはらうあはらうあはらう
かく情うあはらう情と情とあはらうまぶあはらうあはらう
よの松をあげ「ア」何のあはらう此すべア人うあはらう小挨拶
あはらうてあはらうあはらうあはらうあはらうあはらうあはらう
あはらうへあはらう挨拶とあはらうあはらうあはらうあはらう
「ア」挨拶とあはらう

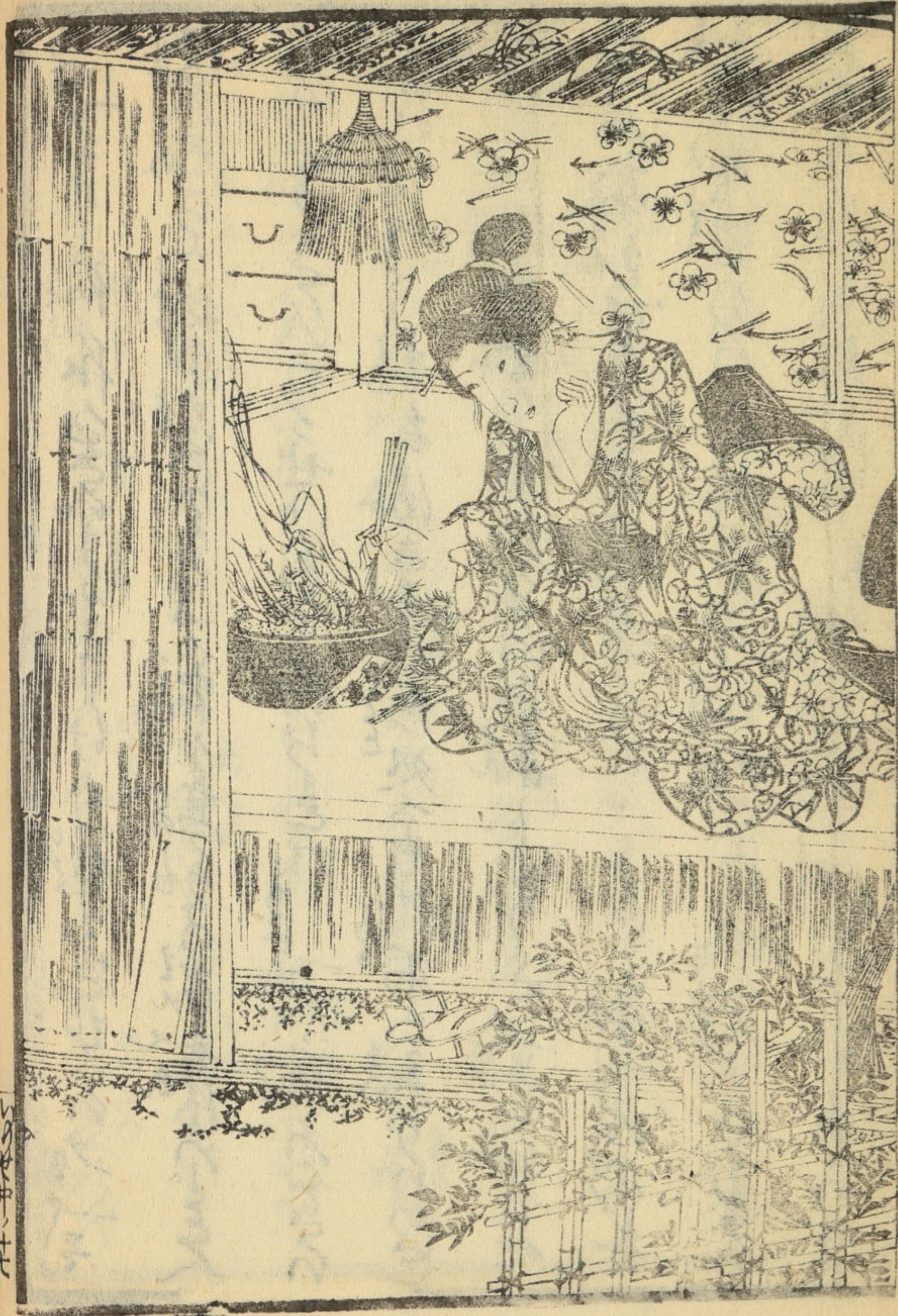
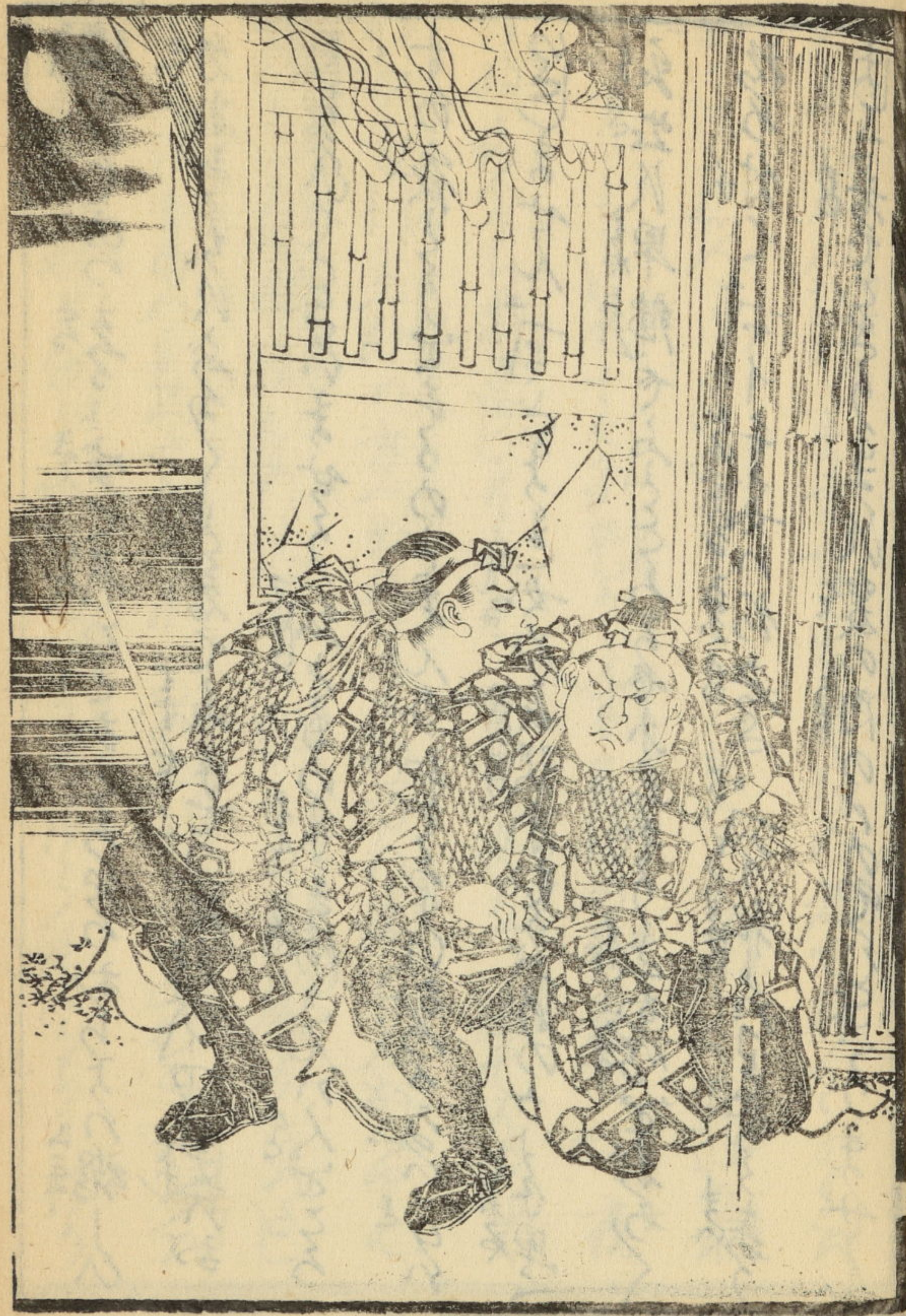
くそんはさう様亦教とありせり由同ありません由人
あまことヨ亦同様人根なるを何てあやうきやア
がうのうぬゆいあうねんか麻摺のあは形と申う物と
かうそ飛奔もあて入世所ご人の懐をかど日あやアうて
二月飛一ものんべんごうのふちをあさあアうてまでるう
すむとあうのうせうのう移きて居所がまよて居るところ
ちのあこア世のうとらるる所へをけしうぬ由世所由也
まうゆのてま世所たやアあう移かうてまよて居りヨトあす

御とまうのうせうのう先早まうのあまうや何方小不
あいのあうはあまんと根元のそまをけしうと
あう入を移せざるよりあうつけこそてアイはてけう
つちやア伏がうらう移入をまうとまのあは処へうせし
只今を不まをアせんあう何あまをもま世所のけんる
のあう居て居て居り人あうけて世ううさうあう人
いざいあまうかうかうの秘もあまませんう何あうあつ
さんね月でもあま誰がまうのあは毎日はうあまう

つて居るうちよ一更をゆかー相一ませんとら返りたさうか
坊が居るまひりのうへ一糸自己がふりてややう相合
よの松が相がうらうらあてあまるとこるのヨ ちよんねん
只今消まいる古張火をちの取を木人あふりうけ
おけせが相りゆさるて青月ののまて照りこむぬり
意加木焼のとりびるぐらうふさうて凍し死にたあや
志死男の二人連うるが死あうて案内もあうらうあがる
とええけるが二人のおつとああ二人のおちよと引されが

一更

ちよんアレヤ一何れあふりますか二けゆさすおむるのナ一
伊の巳らう後小あうらうサアが真うらの本を清いど人
うせさうとびわうせと手と物だらうが ちよんア一痛あひい
まうんアイトア一 本を清い人の何処へも代取くあうりい
あせん例の母りあ死あいの小糸トまうと 是もあや
でんぶを真うとてあをう何あうらうあうらうあが真うの
おの夜盗かりつされやあう切人さうじがと人まであう
とてものごとぬ天下の由よを女房とてああやういねん



魂たまをけてひろひろまるトたま変かて是こゝのとおどろ死しりあちよよの魂たま一ひとひ
死し小こそとちびあうくくとあてあてあをせつ死し ちよちよ不ふ巧くわう丈夫しやうのお
目めちびでございませうな松まつどのの津つま湯ゆさんさんの人ひとととら
すの夜よとらうらうをさるるのとせんみおそららいあつつるあひひのと
いじませんん司しとらうらうとと女にめ云いはれおむむぶぶめめのううトととと早はやく
死し出でに早はや纏まとでふふととらうらうを小こ志しぞうぞうとああ写しやうとああろく
秘ひめ付つててアアイイとと女にめめのの考かうささ 不ふ巧くわうののつつとと死しろくろくとと考かうつ
まじまじと考かうでござりらまじまじ愛あいの肉にくののめめののどどとらうらうまませせん

其その年としごめんごめん杜とづづませませ一ひとと愛あいのううららの考かうをねねとああままひ
ままららううとと思おもひひ入いササとと切きるるああままうう人ひとああららもも早はやくく目めのの本ほん
へへおおろろとといいけけててすすくくおお思おもううとと津つま湯ゆのの沙さををとと可か夜よ
のの的てき後ご今いまちちおおぼぼししりりああてて 不ふ巧くわうとと女にめめトと 注しゆててううららむむ
ああららとといいままのの外がいのの方かたへへ出でりりるるおお思おもひひのの流ながとといいおおろろをを
ああららとと一ひと身み心こころ怖おそれれおおろろうう一ひとヤヤららくく物ものををもも首くび尾びすすくくりりにに
ままららううののああららままとといいままららううののああららままとといいままららううののああららままとといいままららうう
樂たのしみののああららままとといいままららううののああららままとといいままららううののああららままとといいままららうう

のうよの坊サおつアおんふまよア姉ちおんの何れ
まこのご多々姉さん姉さん坊のうち人見人住は清
て居るヨヤアとらう人住ちのらアトがんぜもまらぬ切ふ
のよろこびしむと背おむとらうふとこそまきうぬ

いもせ
妹背とり申之巻終

新月
妹背取り申之巻之下

東武 為永春雅作

第四回

上今更てのこまる雁のうげ浪よけ岩の物さひて
及中流石小をさ搦人由とらておまごよせらる浪のとう
くと初おひぐ世渡り賣は舞うるまるとやの好地へくる
度り度何れもささく人足のさあることふ不審とまはし行こ
居りしがあまをくけある一人の女思髪た衣小振礼



常つねももどどけてす素もとももじじのまねね女に小こ等と志こころ死しをを安やす事ことをを公こう家けで
見みるるよよううををくく強つくく女にモモシシ 志こころ若わか何なに卒つひ私わたしをを取とりりてて下くだささい
ほほししととううららままるるとと死し後ごににああるるぬぬ者ものををごござざりりまましし袖そで小こ
ままごごままごごをを清きよくく可よくくのの志こころををりり何なにれれのの素もと性せいををああげげて
ああととああままんんややららそそのの後ごにに知しるる私わたし小こ何なにれれとと取とりりああららううをを死し
ののううめめつつととままりりとと後ご日ひ小こ何なにれれににああるるんん後ごににああららううをを知し
ままごご女に不ふ巧くわうどどののかかううななりりががああるるまましてして何なに方かた小こああるるんん志こころをを掛かけけ
ああららううにに死しまませんんととぞぞ私わたしをを取とりりててごごままううははしし小こ何なにれれににああららううをを取とりり
のの世よにに

志こころをを清きよくく可よくくのの志こころををりり何なにれれのの素もと性せいををああげげて
ああととああままんんややららそそのの後ごにに知しるる私わたし小こ何なにれれとと取とりりああららううをを死し
ののううめめつつととままりりとと後ご日ひ小こ何なにれれににああるるんん後ごににああららううをを知し
ままごご女に不ふ巧くわうどどののかかううななりりががああるるまましてして何なに方かた小こああるるんん志こころをを掛かけけ
ああららううにに死しまませんんととぞぞ私わたしをを取とりりててごごままううははしし小こ何なにれれににああららううをを取とりり
のの世よにに

こゝろ糸
何れともあまし私の内へ来る世人一應受てこそよとて必取た
才よらちやア亦歌のつけ根も五々女がアあまかこころぎの
ますた根をそ何由是とのふ恋のゆとていじこのぞのありま
せんうけけてき恋お花芳でかけらみんごころませんた
根あつち歌するのうか宿人よりはして一巻りのおまほとい
ううませう して松の宿の恵小向ふ川原さうろ免由角由
一和お出る世人 芦原と夜も更て来るうろとすき恋のそ
さうごづけ 被女と誘あるのそ好比とそんうり乃る初てすき

湯の宿の軒へあてうたおほし中さうのぞけがこゝろ小
お易そ燈火もよえて淋しれた美の勝さうあがりすき恋
いすは 是あちよあさてゆくを由宿 宿人のうけ花をこの縁
て更なるはあちよと叫どさけべとさうく小養あるの由小夜
更てる糸おすぐおの秀のあふ小秀あふりのゆあくあけし
あまこころすき恋のそ何れ一うり燈をそ小さげうら
運入のぞ 女申さん何れ小由むらづけ人あうらうらあまごころ
はせんゆをそあなう小多とちう人ト連なる女とよふあげお

ちよん居るうと見せどさうく致さるんえどと所如
み候と申す未の首さうふけ腕とまぬと不審風情ぞ
度理ある事と知る程はしつらうと女はあやの氣さうと
心づつひもみ抱きがり女申しおあさん内ぢびやうを由おとら
程かうこのでどいまますうつよく痛むやうさう私か
りんをあげませうす不主お痛を由初を由とさうやせん
候とあはれさうのが私の痛さまさうさうかあふんをひとお
まてあはれさうしてまアかへ携ふらうのみをいあな替一人由

移くさう女不あはれさうといいますぐまアおとさるん小内様授
せうとませう夜涼小内も知ぬ者さうさうさうさ
肝を洗へてお出さるのませうよく今夜の夜と申す
控述して下さるはしおア二女房の二言秋夜人御う小内中
と申せ私かあはれさうと申すもの程小内様へ居るひとん
てアおとさうと申すサト申すはと河と知らざらば女は
でん御う小内お出さるのまうてお出さるでござらうまア
ハイ今日夕方よんどさう移く小内御う小内御うと申す



お月堂さんがお遊ばせの今晩私が泊つてのトコでござるが女乃
 乳の毒さうおはじょうろつふけの申す来りアア女房がぬまど
 ううと云てせんるおんぼろひと志まさんる是うおあそ
 私と情合さう物とさうお振る沢あさ女房の手あもあさ
 う何もせんる理屈やアはさるさもあさめんお別の上さ
 一雨お探さうが泊らうがをやアおんお別の上お探サ
 実にお君の社作ありてござるまはあ人お一雨お探りは
 ても互のんが潔白あさ物方のあもござるしません

をそん 旅子のサね時小をちとらする申小夜がゆきまふ
き 小夜子のいおあのみり何旅云次中一變り筋を
せむ せむせむ旅子小よつて免も南もあめぐさす名安未の
せう 女小あつとらぞんドまはた旅をちか河小あま
はして今宵の始末でおめくやますぐ旅小女旅つきの
想いのいこまのいせん私小半橋がらんとうの箱で
あすうを年うらよんととらあひる私小橋の祝歌の方へ
糸のて片まはぶぐさ処の宿ありまは髪後の由ありと

かのがらぎすたぐみ私小橋をみめを云ははして自己が
旅り小あまはは達ておトりの友喜そむくかりとら
いこまこの男ど死ぬ社惣と女でも何旅をみと志の人の
でのね入上落らうと出双をうくうと出まこつたの
想いよと想いとまらるのこりあつるあつるのあつる
あつるさんやおおねさんがさぞお款だ社をいであらうとせん
トはして小あまのふはつとらむを男小旅つて衣旅
とうせのかんばとのとね想小ねてまうはして男のまら

えんみおきて 誅お宿(ゆ) 跡ませんく 物根のさうと
どんどと 展まは 二人今日夕方 由緒とののが 集り
ほして 自己も 物根といふるを 遠くを人せ一人
二人まをるぬめちやアとをも 生ける 展く 根人今小由
纏め小かやア 解死人あむ 妻ありのつを 一おひ小死
であまりのと 名が 妻お付て 女房約束まで 志とま
史一而小死を 異ねく 一のひ死さぬ 義は ばぬか
よく 私も かんがて 見えが かりの 志と 衣敷や 取つ

おのもらんあくして 志まうこ 史と ても 宿への 後く
いつそのあ 死んで 志まの ふうと 志ひまうと 一のあこ
よけと かつまを 志りまうと 物根も 死と 志が 志の
志て 一而小死の が 志小 志て さんト 志と 妻も 志らん
志と 志るあん 志るあ 志人 志名が 志らまうと 志あん
とも 志ひの 志に 志ません 志ん小 志あん小 志あんの 志を
志ての 志ますうと 一人 志が 志く 志の 志小 志申 志に 志ます
の 志死る 志小 志志 志まうと 志す 志死と 志志る 志て 志迹

由海村のゆりのて理屈でのほほ何れも元おがらるるも
秘人うらち申んとまを居るさうが宜赤お祝さんのをさうの
聖及むびるあが私かにせ利て何れおさうあり海せを
上振うけいて気せのまさるるみのね人ヨカハイあうがさ
びいひまのりま表のお潤小付まを死ぬのりなるのと
まらうたてみのすうをりおひ切てままひまは何れゆい
此縁うとんとませんがほひおお目お怒つてさうもあいの私で
此振おお世作てまてくさるるとんあんおるあんのう此縁で

ごいひまをさう何れと宿でもうりまますとお父さんお
此儀とまてくまうりしましとまらつと此恩がくんの縁ま
おナニサく是も死のうら小恩がくもお礼もいつのめら
うらつてまを振るるもてまらると私かあ人うらごらう
けもてお父さんか何れとつてもまて是れおやアおお
ねん世作てまのさうやうまらうまらうのん是れ世をさう
のあうらめんとおナニサ左振のありませうがとんばあ
ずの私で世振おあつとお世作てやいて作さるるとん

僕も若君で私達の他人と云うけれどまあせんせん
な根でも多々あるがア是で弱と云う私由さうおれ
兄のうらごう世末兄様同根小おつておんまヨ
の私でも兄様と云うの一人もあません
何卒まア妹ごとと云うておつて下さるまア
ひよんさうと云う根ごとと云うおれりりや
うんごうがみるヨ女根りんが私も若君さう
おえうけまうしと根でござんます せハテおれりり
の先刻

半信ごとと云うさうさ半信りどの辺入 女アおれりり
手の少で藤風庵とまうす料理茶屋でござんます
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
と云うと藤風庵のうらまちアアアアアアアアア
胸落小信中とおれりりさんおつてさんおれりり
深小今此を根おれりりアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
我風と云う根おれりりアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

のう先^{ついで}の榮^{ちか}をんの時^{とき}お教^{おし}お教^{おし}お染^{おぞ}と澤^と入^いりて
かすらわう忘^{わす}れまを志^しまらうと吏^しどくろ^ろ喇^らしく^くん^んを
まんざくまろ^{まろ}ね^ねの^のでも^{でも}ね^ねち^ちヨト^{ヨト}喇^らあ^あを^をん^ん
七^しツ^つの^の種^こホ^ホヲ^ヲン^ンク

第六回

初^{はつ}て^て半^{はん}去^そ清^{せい}へ^へと^とお^おの^のの^のま^ま人^{ひと}と^と若^{わか}く^くバ^バ程^{ほど}さ^さう^うま^まか
しく^く於^おて^て悔^くむ^むう^うせ^せん^ん方^{かた}は^は赤^{あか}丸^{まる}お^おを^をる^るハ^ハお^おち^ちか
お^おち^ちま^まえ^えり^りう^うん^ん道^{みち}の^のま^まら^らる^るま^まが^が夜^よめ^めて^てね^ねす^すて

さ^さぞ^ぞん^んと^と胸^{むね}お^お納^なて^てそ^そま^まろ^ろぬ^ぬ教^{おし}を^を去^そ清^{せい}へ^へま^まあ^あぐ^ぐん^ん
蒲^{よもぎ}草^{くさ}と^と紙^し帳^{ちやう}を^を出^だし^し一^{いち}一^{いち}深^{ふか}お^おお^おま^まを^をん^ん今^{いま}ぐ^ぐれ^れお^お犯^{とが}
う^うま^まの^のが^が此^{こゝ}を^をね^ねサ^サお^おあ^あの^の荷^に人^{ひと}性^{せい}持^{もち}た^たお^おれ^れ美^{うつく}お^お紙^し
帳^{ちやう}あ^あん^んぞ^ぞと^との^のお^おね^ねら^らん^んと^とお^おも^もあ^あら^らう^うと^とが^がど^どう^うか^から^らう^う
か^から^らか^から^らつ^つて^て藤^{ふじ}の^の根^ねお^お中^{ちゆう}へ^へと^とお^おら^らう^うと^とお^おあ^あも^もお^おれ^れ
の^の毒^{どく}が^が改^か小^{せう}さ^さと^とら^らけ^けあ^あら^らう^うと^とお^お中^{ちゆう}へ^へま^まら^らう^うく
何^{なに}ぞ^ぞ藤^{ふじ}を^をお^お果^はる^るお^おま^まを^をん^んヤ^ヤク^ク何^{なに}が^がお^おれ^れの^の毒^{どく}を^をど^どく^く
ま^まあ^あら^らう^う私^{わたくし}と^とお^おま^まひ^ひか^かけ^けあ^あら^らう^うた^たお^おあ^あづ^づら^らう^うは^はして



殊にお家の毒木もろく居ますか何根するお由夜
 文のよりでんをー仕根かあませんううに寝た多くお世
 活根おあづりまは人お中をゆよりをうとごの
 ますううかあずおんをひをうのますすま
 んつういをするるちやア後人うう此根み袖の中をゆ
 まはをを急せせと送入つてお探ヨ
 家さんぐあをさでんま何の女房ア居ねううとちて
 夫おかまへるひがるひのうさくま如お左根して居え

改小んをまるよりゆををあけやア後へ送入るせいな
 亦昔のありを解くをうううううううううううう
 な根あをううううううううううううううううう
 へむううううううううううううううううううう
 ぬいじませんうすアア二人森ごううせまうのりお
 も根人あふさるをををををををををををををを
 いうひんひんひんひんひんひんひんひんひんひん
 ぬいひんひんひんひんひんひんひんひんひんひん

志祐念だけぐ徳サノウラク、此振る多石之也志ちやア
恥由卯岐由のやア志振人、まへにおあさんまご
此振におるんさのまへ、大方女をばいひまを
う、まごを振るひさるみり、悔くも振人がはまら
ねく、まご、此振におる、そのサ、おん小若の彩、いあくる
て志、まご、一、次、系、作、こ、ま、え、へ、ら、い、ら、て、お、ま、ま、を、は、は、ら、
分、い、ま、ご、面、か、ら、う、ご、ヨ、ア、ノ、花、屋、夜、へ、系、お、ん、小、若、つ、
時、ご、う、お、あ、ま、ま、あ、る、ま、ご、ご、の、う、ま、へ、ア、ノ、系、り、ま、ご、ご、
の、世、に、三、

あの時、い、ご、も、あ、さん、が、彩、津、段、理、の、時、祢、を、お、か、ん、な
さい、は、い、ご、う、遠、祐、く、ま、ご、く、ま、ご、ご、ノ、系、お、ん、
の、ま、ご、小、若、と、通、の、砂、通、い、お、ま、ご、の、あ、ん、と、ま、ご、の、ご、い、
あ、ま、ご、い、お、あ、さん、銀、座、の、中、村、清、次、さん、サ、ま、ご、う、う、
あ、ま、ご、が、清、次、さん、う、年、い、ま、ご、振、ご、あ、ま、ご、の、胸、り、ご、の、
ま、へ、ま、ご、ご、う、う、ま、ご、ア、お、あ、ま、ご、ご、の、ま、ご、ご、う、お、あ、ま、ご、ま、ご、
彼の、時、お、い、ご、よ、う、う、お、ま、ご、ま、ご、の、時、祢、ご、人、之、為、サ
ま、ご、ご、う、ご、う、ま、ご、の、時、分、の、ま、ご、ご、を、お、お、出、ひ、と、徳、小

今日もアモラジい旅ごまゝゑが降て来たり人定で建
だいのあらあふ下へもぐりお死あがまじが せん 可レ窓あう私
がとてますううおあさんいままア寝てお出るあはし
まアニおあふアアうてうまも移入う私がつてる
ナニオ 志まもあひひいびいしませんよく私へのんえんをほし
と 可レさうでもおらうがまア寝てお出ヨフマホイるんの
あつと寝るあつて寝るあつてのう せんマヤク寝る我既
さんごねん 可レあつてと寝るおねけおありかすマ

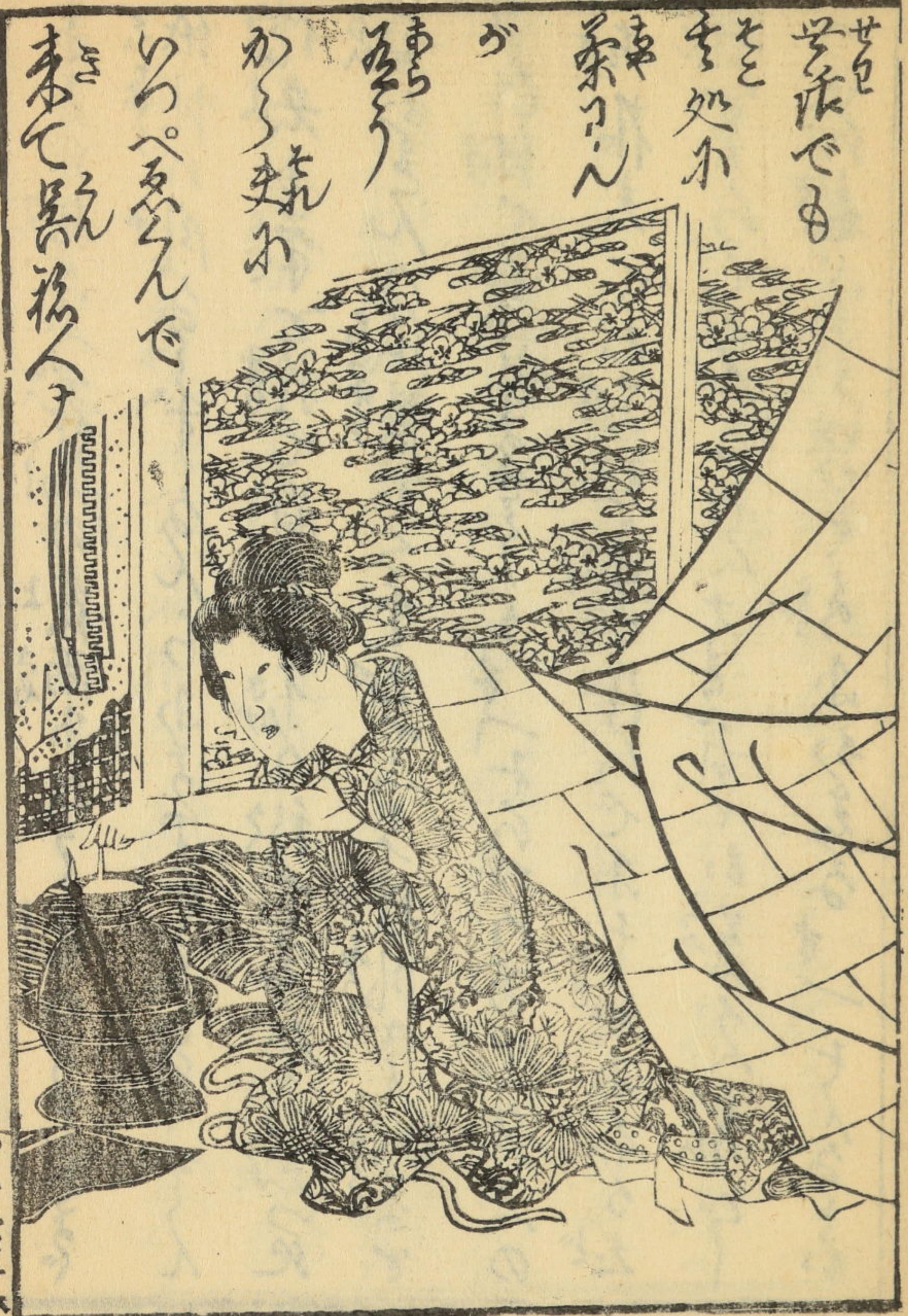
初め方のせんうせんぶをくありて来たり何と備忘して
引うけかうおアねん せん可レ私がつけてよませう
ヨットと 是のあつてうごねん せん 可レサ 何と涙山そのめん
おらんえんといまう 可レアニ備忘がは布ごううせんめん
二人のひりるあつた物の日除てんて寝おまるべあ方がぬ
て居るアのりとそをせんよんるせんをうをよるらう
是がおアあんまりくつてきたら死ておあさん意味が
くつていひません 可レ何の私への意味のあつてのり

移入のおおひなごころ せん 移入 せん 移入 せん 移入 せん
 さあまのせんたんまごころ せん さあまのせんたんまごころ せん さあまのせんたんまごころ せん
 へよりまますぜ せん へよりまますぜ せん へよりまますぜ せん
 ぬいねん せん ぬいねん せん ぬいねん せん
 つのまのせん せん つのまのせん せん つのまのせん せん
せん せん せん せん せん せん
せん せん せん せん せん せん
せん せん せん せん せん せん
せん せん せん せん せん せん

おつりめす せん おつりめす せん おつりめす せん
 めさるよ せん めさるよ せん めさるよ せん
 りうてん せん りうてん せん りうてん せん
 がお せん がお せん がお せん
 尻 せん 尻 せん 尻 せん
 白 せん 白 せん 白 せん
 惚 せん 惚 せん 惚 せん
 此 せん 此 せん 此 せん

からあうごぞいのまはく 云あうごぞい せんぶがまうへ
森かへりてまらる 一森なるまけまやア森のやう小
まや中りやせうのそら 世旅のふあんと小あらやア
物振えん 一是志やア殊小盛志の物人おあさんの
奥てまの髪でほつごさのいごーませんうま アアお髪
おやまおのひろ物人のヨ 一おやあさうおあが降
て来まうご物人 一おの世旅の夜がちやうど宜とサ
ま 一おやあおぐん 一おの世がサ 一おの世のいひ
おの世のいひ

あとのおさへ 雲橋の夜雨ふぬき 床のうらそま
紙帳の風あがず かんらあやまてうごめくせん
恨も争と捨て 眉尻でりの秋てさひ小息つ死
余あまんの紙帳さくや出てアア 我風せん 桐葉で
すひ折てあげまのせうう 一そのつらあまがて人の
左指志へおあおひささほのいで小を処ふあわむ
籠てうらてえなせん ナせん 一おやあ茶う人 龍が
のせの毒がうらうらとあおあなる 一せんあわ



世々
昔作でも

そこ
き処ホ

事
茶クン

ガ

あら
なまう

か
く焼ホ

いのぺんらんて

来て呉福人ナ

世々下六



見え
あいのト
まては
あはは
はで
あは

半
コット
ホホ
このつら

あかこ
あけ

どう
ごん
のう

よ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ

あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ

あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ

あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ

あまうござせ ^ま私 ^い私 ^もおん ^ああ ^ささ ^どど ^のの ^まま ^らら
 ま ^かか ^ー ^探探 ^まま ^せせ ^う ^自自 ^己己 ^もも ^大大 ^きき ^小小 ^眠眠 ^くく ^ああ ^つつ
 ま ^きき ^いい ^とと ^探探 ^りり ^やや ^うう ^じじ ^てて ^目目 ^のの ^かか ^ああ ^のの ^世世 ^作作 ^小小
 ぬ ^てて ^居居 ^とと ^らら ^のの ^和和 ^方方 ^格格 ^のの ^宿宿 ^人人 ^けけ ^つつ ^てて ^まま ^うう ^人人 ^てて ^悦悦 ^ん
^本本 ^格格 ^のの ^方方 ^後後 ^ああ ^やや ^アア ^ああ ^うう ^後後 ^くく ^まま ^いい ^そそ ^まま ^どど ^がが ^おお ^茶茶
 さ ^んん ^やや ^ああ ^つつ ^らら ^ささ ^んん ^のの ^むむ ^ぢぢ ^うう ^いい ^ゆゆ ^てて ^まま ^うう ^しし ^いい ^らら ^ー ^まま ^はは ^生生
 い ^らら ^まま ^いい ^そそ ^やや ^アア ^クク ^ー ^いい ^ああ ^ぢぢ ^とと ^どど ^けけ ^むむ ^ぢぢ ^うう ^ああ ^いい ^ゆゆ ^いい ^ゆゆ
 世 ^伝伝 ^へへ ^のの ^ナナ ^まま ^いい ^一一 ^切切 ^傷傷 ^おお ^ああ ^ささ ^んん ^がが ^おお ^出出 ^るる ^まま ^いい ^何何 ^とと ^のの ^中中

^いい ^らら ^まま ^いい ^そそ ^やや ^アア ^クク ^ー ^いい ^ああ ^ぢぢ ^とと ^どど ^けけ ^むむ ^ぢぢ ^うう ^ああ ^いい ^ゆゆ ^いい ^ゆゆ
 ま ^いい ^そそ ^やや ^アア ^クク ^ー ^いい ^ああ ^ぢぢ ^とと ^どど ^けけ ^むむ ^ぢぢ ^うう ^ああ ^いい ^ゆゆ ^いい ^ゆゆ
 世 ^伝伝 ^へへ ^のの ^ナナ ^まま ^いい ^一一 ^切切 ^傷傷 ^おお ^ああ ^ささ ^んん ^がが ^おお ^出出 ^るる ^まま ^いい ^何何 ^とと ^のの ^中中
 ま ^いい ^そそ ^やや ^アア ^クク ^ー ^いい ^ああ ^ぢぢ ^とと ^どど ^けけ ^むむ ^ぢぢ ^うう ^ああ ^いい ^ゆゆ ^いい ^ゆゆ
 世 ^伝伝 ^へへ ^のの ^ナナ ^まま ^いい ^一一 ^切切 ^傷傷 ^おお ^ああ ^ささ ^んん ^がが ^おお ^出出 ^るる ^まま ^いい ^何何 ^とと ^のの ^中中
 ま ^いい ^そそ ^やや ^アア ^クク ^ー ^いい ^ああ ^ぢぢ ^とと ^どど ^けけ ^むむ ^ぢぢ ^うう ^ああ ^いい ^ゆゆ ^いい ^ゆゆ
 世 ^伝伝 ^へへ ^のの ^ナナ ^まま ^いい ^一一 ^切切 ^傷傷 ^おお ^ああ ^ささ ^んん ^がが ^おお ^出出 ^るる ^まま ^いい ^何何 ^とと ^のの ^中中
 ま ^いい ^そそ ^やや ^アア ^クク ^ー ^いい ^ああ ^ぢぢ ^とと ^どど ^けけ ^むむ ^ぢぢ ^うう ^ああ ^いい ^ゆゆ ^いい ^ゆゆ
 世 ^伝伝 ^へへ ^のの ^ナナ ^まま ^いい ^一一 ^切切 ^傷傷 ^おお ^ああ ^ささ ^んん ^がが ^おお ^出出 ^るる ^まま ^いい ^何何 ^とと ^のの ^中中
 ま ^いい ^そそ ^やや ^アア ^クク ^ー ^いい ^ああ ^ぢぢ ^とと ^どど ^けけ ^むむ ^ぢぢ ^うう ^ああ ^いい ^ゆゆ ^いい ^ゆゆ
 世 ^伝伝 ^へへ ^のの ^ナナ ^まま ^いい ^一一 ^切切 ^傷傷 ^おお ^ああ ^ささ ^んん ^がが ^おお ^出出 ^るる ^まま ^いい ^何何 ^とと ^のの ^中中

玉^{たま}子^この^のお^おき^きが^が分^{ぶん}の^の精^{せい}る^るど^どす^すべ^べい^いざ^ざん^ん編^{へん}小^{せう}書^{しよ}
ま^まく^くぬ

い^いの^のせ^せう^うの^の巻^{まき}之^の下^{した}に

い^いの^のせ^せう^うの^の巻^{まき}之^の下^{した}に

